ケース２

あなたはクリスチャンホームで育った30代前半の未婚女性で､親元を離れて暮している。地方の政令指定都市にある大学を10年前に卒業したあなたは、その街で市役所職員になることを選んだ。就職氷河期に公務員の門は狭く、倍率50倍の地方公務員一般職に合格したときは祈ってくれた家族と所属する教会のメンバーたちに心から感謝した。大学入学当初から通っているその教会の会員数は50名程度で、親元を離れたあなたを本当の家族のように思ってくれる。

数年前、この教会にある変化が起きた。牧師が教団の全国教職者会に出席した際に「教会の社会的責任」について教える海外の有名な牧師の話に感動してから、牧師が頻繁に「地域に仕える」ということを強調するようになった。「ケープタウン決意表明」という小冊子を牧師は何度も読み返しており、あなたを含む信徒の一部は牧師を通してその本を購入した。信徒の一部には戸惑いを覚えている人もいたが、大学では地域社会学や児童福祉に関する授業も履修しており、市役所でも最初の配属先が都市計画部だったあなたは、いままで「別々のもの」と思っていた自分の仕事と教会の働きが初めてリンクしたように感じ、何か説明出来ない高揚感を抱いていた。

大きく事が動いたのは1年前に、「地域に仕える」というタイトルのセミナーを教会主催で行ったときだった。講師はアメリカ人の牧師で、彼は西海岸の人口20万人の郊外の街で長年開拓伝道を行ってきた。教会員の数は400名から500名と、アメリカの教会としては平均的なサイズで長年推移してきたが、10年前に牧師は神から「街の人々に仕えなさい」という啓示を幻とともに見せられた実践した。最初は生活困窮者への炊き出しから始まった働きは10年間で発展し、独居老人の支援、シングルペアレントへの支援、アルコール中毒者へのピアサポートグループの提供、児童養護施設でのクリスマスイベント、青少年へのエイズ予防啓発や男女恋愛の講習会、山火事で荒廃した公用地への植樹活動にまで及んだ。20万人の住民達の教会へのイメージは激変し「何か困ったことがあったら教会に」というのが街の常識になった。現在礼拝出席者は2,000名を超え、牧師は昨年、連邦議会から表彰され地方紙の記事になった。いまも全米から教会リーダー達の研修訪問が後を絶たない。

あなたはセミナー後も1週間以上、そわそわしていて職場でも「何か良いことでもあったの？」と聞かれるほど胸躍らされていた。それから1ヶ月ほどして、「子どもの貧困」に関する夕方の報道番組を見たとき、アメリカ人牧師の温かい手を思い出した。「これらの小さい者のひとりにしたのは私にしたのです」牧師はそう言いながら、「いまから1ヶ月、社会の必要に敏感になってください。そして、あなたにとっての『小さな者のひとり』は誰な

のか、神に聞き、祈り求めてください。きっと神は明確にあなたに示してくださるでしょう」といって、大きな手を頭に置いて、参加者の私のためにも涙を流し祈ってくれたのである。

あなたは、自分にとって「この小さい者のひとり」とは地域にいる恵まれない境遇にある子どもたちのことなのかもしれない、と考えた。テレビやセミナーの一時的な影響かもしれないと思いそれについて深く考えることはせずその日は床についたが、その日から「子どもたちのために仕える」という思いは大きくなるばかりで、もはやそれについて考えないのが難しいほどになった。「もしかしてこれは、本当に神の導きなのかもしれない」と思い牧師に相談すると、「もしそれが神からのものなら、神さまは必ず御言葉と状況を通してそうだということが分かるようにしてくださるので、御心であればそうしてくださるよう祈りなさい」というアドバイスをいただいた。

その 1 週間後、出勤中の自動車の中でなぜか分からないがラジオを聞きたくなり AM の電波に合せると、「宗教の時間」という、キリスト教の牧師が話す番組が聞こえてきた。牧師はそのとき「あなたの目の前にいる人を助けるということを躊躇してはいけません」という迫りをもって、ルカ 10 章の「サマリヤ人となる」ことについて熱を帯びて語っており、あなたはまるで自分自身に直接語られているような感覚を覚えた。翌日、教会の K さんという夫人と数年ぶりにファミレスで待ち合わせをした。彼女のほうから「話がある」という SMS が携帯に届いたのである。「実は、まだ誰にも話していないんだけど、、、」と K さんは話しはじめた。子ども 2 人が大学生になり家を巣立った K さんは、2 年前から『子ども食堂』を教会ではじめたいと思っていて、先日の「地域に仕えるセミナー」に出席したときに、これは神の御心だと確信したという。はじめるにあたり協力者を与えてくださいと祈ってきたが、どうしてもあなたのことを神から示され頭から離れないのだそうだ。

あなたは確信した。これは神からの導きだ。それからの 2 年、物事は大きく展開した。新しく生まれたその働きは、ルカ 10 章 37 節の「あなたも行って同じようにしなさい」という聖書箇所から、「コミュニティキッズホーム 1037」と名付けられた。牧師も「地域社会に仕える」というビジョンを掲げ続けていたため、教会側からの全面的なサポートもあり、事業は堅調に発展し、3 年目には NPO 法人化も視野に入ってきた。教会の近所の、特に公営住宅に住むシングルペアレントの子どもたちとその親にこの活動は熱烈に支持されたし、あなたのコネクションを使って出身大学からボランティアで勉強を教えに来てくれる大学生も与えられ、そのうち 2 人はいま洗礼準備をしている。あなたの職場からも、地域ボランティアに興味がある同僚がいて、2 名はこの働きの運営理事会にも参加するようになり、1 名はあなたと一緒に洗礼準備の学びをはじめた。また、週末には牧師に同行し、他県にある教会に出向いて「教会が地域に仕える」というセミナーで証を頼まれることも何度かあった。参加者は「フルタイムの聖職者ではなく、あなたのような普通の社会人が地域に仕えている

姿を見るのは本当に励ましになる」と感激と称賛を口にした。あなたはこの 2 年を振り返り心から神に感謝した。神は私を用いてくださっている、という深い充実感が心を支配していた。そんな 3 月に思わぬ辞令が出たときは動揺を隠せなかった。時間外の呼び出しや残業が多く、土日祝日の出勤も多い児童相談所への配属が決まったのである。これまでのように「子ども食堂」の働きに参加できなくなるどころか、日曜日に礼拝に出席できないことも増えてくるだろう。

じっさいに新しい職場で働き始めて半年が経つ。激務であることに加え、慣れない部署なので覚える法律や業務の数も多く、「こども食堂」どころか教会の働きにすらほとんど参加できなくなった。土日は消耗しきって家で寝ていることが多くなった。共同創始者の K さんや牧師には「4 月からしばらく、私は参加できなくなるかもしれない」と言って理解してもらっているが、しばらくどころか永遠にそうなるかもしれない。そうなるとこの子ども食堂の働きは、維持していくのが難しくなるかもしれない。2 年前に「神から語られた」と思ったあの熱い思い自体が、自分の野心や自己実現の欲望による錯覚だったのではないのだろうか？いまの児童相談所の仕事は大変だが、市民のニーズに応答する仕事だというのがやればやるほど分かってくる。教会が自発的にやっていることは安定性も確実性も少なく、私ひとりが配置転換になっただけで働きの根幹が揺らいでいるが、法律と徴税と議会に裏打ちされた市役所の公共事業は市民の必要に安定的に応答できる。自分はいままで教会を通して自己実現しようとしてきただけであって、もしかして本当に神に仕えるというのは、今の仕事にひたむきに打ち込むことなのかも知れない、、、。

設問１．この主人公の行動について、批判的に議論してください。
設問２．この主人公はこの後どう行動すべきなのか議論してください。